

「理論」をどう実践するか

- 正しい実践をするために -

吉備国際大学 岡崎 幸友 (3447)

キーワード：対人支援、理論と実践、福祉の哲学

### 1. 研究目的

澤瀉久敬は、「哲学と科学」のなかで理論と実践のどちらが「尊いか」という問いを立て、生きることがすなわち「実践」であることを理由に「実践」の尊さを論じている(1998:19)。しかしながら、続けて「実践というものはそれがただ実践であるから尊いのではなく、正しく実践されたときにのみ尊いのです。そうしてそのように正しく実践を導くものこそ理論である」とも述べている(1998:22)。

対人支援の文脈において問われる「理論」と「実践」との関係は、時として対立構造の中で論じられ、双方が批判的關係にあるかのように受け取られることがある。だが言うまでもなく、両者は「車の両輪」の関係にあり、そもそも対立的に捉えられること自体に問題がある。この問題の原因について意識を向けてみれば、両者の関わり、あるいは連動性が不明瞭であり、「理論は理論」、「実践は実践」という割り切りが暗黙的に受け入れられているからではないだろうか。しかし、澤瀉の指摘に従い、「正しく実践する」ための「理論」という位置関係を確認すれば、その「理論を学ぶ(あるいは教える)こと」はもちろんのこと、「理論」を「実践」の中でどう実現させるのかまで射程して学ぶ(あるいは教える)ことこそが重要なのではないだろうか。

そこで本発表では、社会福祉を支える理論が、実践において具現化されているとする「根拠」について考察することが目的である。

### 2. 研究の視点および方法

社会福祉士及び介護福祉士法の改正に伴う養成カリキュラムの見直しを契機に、社会福祉士養成教育においては、「実践力を持った専門職」の養成という方向が示された。この文脈における「実践力」の教授方法については今後さらに深めていくべき課題である一方で、専門職に求められている「実践力」の備わった人材とするために、実際的な効果を発揮するために必要な理論を、いかに反映させるのか、が研究の視点となる。

社会福祉学は「実践の学」と呼ばれることを踏まえれば、実践に対する理論の役割を理解した上で、実践に応用する力を習得させることが肝要となる。このことを実現するためには、実際の場面を想定しながら「理論」を落とし込むことであり、このとき「価値と倫理の教育」の方向性が見いだされる。

### 3. 倫理的配慮

本研究における参考文献、引用文献の取扱い、およびその他の事項については、日本社会福祉学会倫理研究指針に基づいて行った。特に文献引用の際には、自説と他説を峻別することに注意を払った。

#### 4. 研究結果

社会福祉士養成教育を社会福祉教育の一つとして捉えれば、教育の成果は、実社会において、「対人支援職」としての役割を全うできる力量を教授したかどうかにある。そのため教育課程においては、講義科目で「知識」を教授し、演習や実習を通して「実践力」の習得を求めている。しかし、例えば演習における事例検討や、実習を通しての利用者との関わりに、リアリティを持って取り組むように促すことは容易であっても、経験の浅い学生に対して、そこに自らを投じさせて理解させることは困難を伴う。

そのため、「相手」に対する力量の習得は、就職先での研修や、職人的技術の習得によることが多くなり、経験を通しての単なる「実践」上での理解に偏ってしまう傾向にある。

一方で、対人支援職が対峙する「相手」は、実際的な苦しみを抱え、生活困難に喘ぐ者である、という事実を前にすれば、その「苦しさ」は、対人支援職に向けられている「苦しさ」であると言える。だからこそ、「私」はその「苦しさ」とどう向き合うのか、ということが問うべき問いとして現れてくる。

しかしこの問いに対する答えを教授することができないのは、現在の教育課程においては、その「苦しさ」を理解するという「実践」と、正しく理解させるための枠組みとしての「理論」との接点に関する教育が希薄であり、その背景に言及すれば、実践が尊ばれるという構造を前に、深く考えるという思考にまで達していないからではないだろうか。

例えば、「人権と社会正義の原理は、ソーシャルワークの拠り所とする基盤である。」とするソーシャルワークにおいて、「人権」や「社会正義」という「言葉」を説明すること、あるいは「言葉」として理解することは、そう困難を伴うことではない。だが「言葉」の定義や解説ではなく、「言葉」に込められているその「意味」を改めて問うたとき、また実践の根底を支える「理論」としてその「言葉」の役割を明確に意識したとき、真の意味で理解をしているかという問いに対して心許ないのは、理論を深く考えるという「思考」にまで達していないという現状から、まず認識しなければならない。

「他人事を我が事」と深く思考するには、想像力や理論、現場での経験などが必要となってくる。理論だけでは、目の前の苦しむ人を支援することはできないが、理論のない実践であれば、盲目的になり「私」と「相手」の想いが正確に伝わらないであろう。そのため正しい実践とする理論が必要であり、また理論を具現化するための実践が必要となってくる。この「理論」と「実践」を結びつけるものが「思考」と言えるのではないだろうか。

まず必要なのは、教員自らが、「他人事を我が事」と自らに問いかける力である。澤瀉の「哲学はいかなる事柄をも自分の問題として取り上げねばならない」(1998:24)という指摘に、真摯に向かい合うことが実践するための出発点である。

#### 【参考文献】

澤瀉久敬(1998)「哲学と科学」NHK ブックス